

Animal assisted intervention for oncology and palliative care patients: A systematic review

Pinto KD et al.

Complementary Therapies in Clinical Practice. 2021

担当：竹内

1. 背景

世界的に平均寿命は延びているが、長寿化は必ずしも健康寿命の延長を意味しない。慢性疾患は患者と家族に大きな身体的・心理的負担をもたらす。特に悪性腫瘍は依然として主要な死亡原因の一つであり、2018年には世界で約1800万人の新規患者と900万人以上の死亡が報告されている。

がん診断や治療は、患者および家族の生活の質（Quality of Life: QOL）に深刻な影響を与える。化学療法や侵襲的治療、入院生活は心理的ストレスや社会的孤立を引き起こす要因となる。また、臨床的に有意な心理的苦痛を抱える外来がん患者は15～42%に及ぶと報告されている。

このような背景から、近年、従来の医療を補完する手段として補完代替医療（Complementary and Alternative Medicine: CAM）が注目されている。米国では成人の約38%、小児の約12%が何らかのCAMを利用しているとされる。

その一つが動物介在介入（Animal Assisted Intervention: AAI）である。AAIは、人と動物の関係性（human-animal bond）を活用し、治療的利益を得ることを目的とした介入である。

AAIは主に以下の2つに分類される。

Animal Assisted Therapy (AAT)：医療・教育・福祉専門職が実施する構造化された治療介入

Animal Assisted Activities (AAA)：レクリエーションや訪問活動など比較的非公式な活動

AAIはすでに様々な疾患領域で研究されており、統合失調症、認知症、PTSD、自閉スペクトラム症などで有益性が報告されている。しかし、がん患者や緩和ケア患者を対象とした研究の体系的整理は限られていた。そこで本研究は、AAIががん患者および緩和ケア患者に与える影響を検討することを目的として行われた。

2. 目的

がん患者および緩和ケア患者に対する動物介在介入の効果を評価した定量研究を体系的にレビューすることである。

特に以下の健康関連アウトカムに着目：気分、ストレス、不安、抑うつ、生活の質、痛み、心拍数、血圧、生理学的バイオマーカー

3. 方法

<文献検索>

用いたデータベース：PubMed、Scopus、Lilacs

検索期間：2019年11月に実施。2021年1月に再検索を行った。

検索語：animal assisted, dog therapy, pet therapy, canine assisted AND cancer, oncology, chemotherapy, palliative

※PRISMAガイドライン（The Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses）に従いレビューを実施。

<選択基準>

対象研究

- 査読付き原著論文
- 定量研究
- AAI の健康関連アウトカムを評価

対象患者

- がん患者
- 緩和ケア患者

出版年および言語の制限は設けなかった。

<研究の質評価>

研究の質評価には以下を使用した。

RCT→ Cochrane Risk of Bias Tool

非ランダム化研究→ MINORS (Methodological Index for Non-Randomized Studies)

4. 結果

<研究数>

検索結果：376 研究

最終選択：10 研究

<研究国>

米国：6、イタリア：2、日本：1、ブラジル：1

<出版年>

2003～2020 年

<対象者>

サンプルサイズ：19～178 人、中央値 30 人

対象：成人が約 70%

平均年齢：8.6 歳～70 歳

<介入動物>

すべての研究でセラピー犬が使用された。1 研究では、うさぎ、猫も使用された。

<研究デザイン>

準実験研究または介入前後比較デザイン：8

クロスオーバー研究：1

RCT：1

<主なアウトカム>

○気分

4 研究中 3 研究で改善

改善項目

- 心配
- 疲労
- 恐怖
- 悲しみ
- イライラ

○痛み

4 研究中 3 研究で改善。特に小児がん患者で有意な改善が報告された。

○生活の質

3 研究中 2 研究で改善

改善領域

- 情緒的ウェルビーイング
- 身体的ウェルビーイング
- 機能的ウェルビーイング

○不安・抑うつ

一部研究で改善が報告された。

特にペット飼育経験のある患者で不安が低下する傾向が示された。

○生理指標

評価された指標

- 心拍数
- 血圧
- コルチゾール
- α アミラーゼ
- IgA

結果⇒有意差なし

○小児患者での特徴

小児がん患者では以下の効果が報告された。

- 気分改善
- 痛み軽減
- ストレス低下

さらに医療スタッフは

- 食欲改善
- 医療処置の受容
- 病院適応
- 幸福感の増加

を観察した。

○緩和ケア患者

緩和ケア病棟研究では

- 気分改善
- 良好な体験
- 犬が会話を促進 などが報告された。

また動物の存在は、患者が敏感な話題について語るきっかけとなった。

5. 考察

本レビューでは、AAI は心理社会的側面の改善に最も効果がある可能性が示された。

特に改善が示唆されたのは、気分、痛み、QOL だった。一方、生理指標への影響は明確ではなかった。

研究の問題点

AAI 研究にはいくつかの課題がある

1. サンプルサイズが小さい
2. 研究方法のばらつき
3. 介入方法の違い
4. 測定尺度の不統一
5. RCT が少ない

また AAI は動物、ハンドラー、患者、医療スタッフなど多要素からなる複雑介入であるため、標準化が難しい。

研究の限界

1. 灰色文献を検索していない
2. データベースが限定
3. 研究数が少ない
4. 小児・成人の比較解析不可
5. RCT が 1 研究のみ

6. 結論

動物介在介入は、がん患者および緩和ケア患者の心理社会的および生理的指標を改善する可能性がある。しかし研究の異質性が大きく、確固とした結論を導くには、大規模研究、多施設研究、より厳密な研究デザインが必要である。